

## 随 想

黄 裕益



昨年、機縁で台湾大学の農業工程系学系長が筑波大学に訪れて来ました。その日は大晴天でした。ところが翌日に学系長がすぐ台湾に帰るので残された半日ぐらいの時間を観光案内のように学系内とキャンパスのあちこちを案内しました。帰日、私は空港まで送って行きました。途中、車の中で学系長が自己反省の顔をしながら、一言つ

ぶやきました。それは、中国語の「嘆為觀止」の簡単な四文字でした。

学系長は、若い時に留学の難しい時期にアメリカに行き、帰国後はずっと大学の教育に献身されています。この間に、台湾大学の総務長と水工試験所主任の経験を経ち、海外出張の際には、農業工学の有名な大学を訪れていたそうです。私は学系長とは長い間の知り合いです。学系長は負けず嫌いであり、曲がった事の嫌いなタイプの人です。短い時間の見学でしたが筑波大の設備を口に出して驚かれています。ただ、学系長は滅多に言葉にしてほめる人ではないのに。聞いた瞬間、私もびっくりしました。その夜、おちついて考えた後、多分学系長は私に何か言いたい事があるのではないかと思います。今まで、台湾大学農業工程系の学生にとっては専攻科目の勉強より、英語の勉強に力を入れる人が多い。それに、卒業生の中の90%以上がアメリカに留学に行っていることも現状です。日本に来る学生は10年間に二、三人にすぎない。これは、そのまま台湾で就職するのは難しい。しかし、アメリカに行けば、専攻も簡

単に変えられ、好きな仕事に就けられるという事が原因だと思います。確かに、同級生の皆様がアメリカに行ったらよい仕事があったし、家族もできて幸福に暮しているそうです。ただ私一人だけが異郷の日本で悩んでいる。これから、私のストーリーは皆を笑わせる話題になるでしょう。

台湾大学の農業工程系は、大別して水文、かんがい、水汚染と農業施設など4つの研究方向に分かれています。この学系は歴史のある古い学系ですが、現実の社会に余り注意を払われていないため、ついに学系の経費は理工学系より一層少なくなりました。このように限られた経費で筑波大みたいに一流の教育設備を持つことは夢みたいであります。ですから、農業工学に対してある程度心構えがしっかりしている学生があれば、教授はそういう学生に対して留学するように推めています。幸い、私はそのよう一人で、大学院では、「温室の鉄骨の最適設計」というテーマをやり、修士号を取りました。卒業した頃には、これから台湾で温室が必要になることを見込んで、大学に残って温室について勉強していました。約二年前、日本に留学する機会があり、いきなり大金と「台湾における温室の自然換気に関する研究」という研究テーマを持って日本にきました。筑波大に入ってからには本当にしあわせで、先生方に面倒を賜わり、今は奨学金ももらえるようになりました。この一流の環境の中で生活し、安心して勉強できるはずですが早くも二年間が過ぎました。しかし、残念ながら、思ったより進んでいない。本来ならば、このような優れた設備が沢山備っている一流の環境の中で、研究を行っているのだから私の研究も一流のものにしなければならないのかも。

その日、学系長が私に言いたかった事は多分これでしょう。今回、このよう機会を頂き、もっと言いたい事もたくさんあるのですが、最後に筑波大の農林工学に入った事は間違いのない事と確信し、より一層はげんで行きたいと思います。